



それぞれの人形の個性を表現できるように考えながら、小松姫物語の稽古に励む座員の皆さん
写真下) 左から堤優衣さん、石井愛衣里さん、高野智花さん 上) 左から堤琉翔さん、高野光太郎さん、堀越すずはさん



写真上) 久しぶりの孫たちに会い、小躍りする義父・真田昌幸を演じる高野さん
下) 沼田城の石垣をイメージした舞台上、小松姫が城を攻める昌幸を阻止する場面

小松姫の豊かな人間性を表現 家族のような座員 仲良く稽古

沼田城主の真田信之の夫人・小松姫の生き様を描いた「小松姫物語」は座のオリジナル作。敵となった小松姫の義父から沼田城を守るため、侵入を阻止するシーン。小松姫の気丈さが現れています。一方、義父の思いをくみ、隠れて孫に会わせる場面では、優しい心を持つ小松姫を描いています。座長の金井竹徳さんは「あらゆる場面で小松姫の心を感じて動かせるかが重要」と力を込めます。

歳の差関係なく、遠慮なく入っていけるとところが同座の1番の良さ。稽古以外にも公演を観に行ったりと交流が多く、大人は若い座員をかわいがり、子どもは慕うという家族のような関係が心地良く感じるそう。座員の絆が生み出した人形芝居の伝承に、これからの期待が高まります。

◆ 沼須人形芝居あけぼの座 秋の公演各種 ◆

〈沼田市文化祭〉

とき 11月5日(土) 午前10時
ところ テラス沼田1階防災広場

〈伝統芸能発表会〉

とき 11月20日(日) 午後1時30分
ところ 利根沼田文化会館大ホール

〈沼田市文化遺産の祭典〉

とき 11月12日(土) 午前10時
ところ 材木町神明会館



稽古や座員などを
Instagramで紹介
AKEBONO_NUMASU

一体の人形に思いを込めて

物語から読み取れる人形の気質や体格などをイメージしながら仕上げるという生方さんは、人形の手の取り付けから最後の頭を付けるまでに、凝った衣装で約5分で完成させます。指の動きやすさを第一に、着崩れないように補正をしっかりとしつつ、人形の顔が観客からよく見えるように全体のバランスも考えます。

現在は裏方で役者を見守ることが多いという生方さん。「客席からの拍手がうれしい。最高齢ですが、若い子たちと打ち上げに参加するのが楽しい」と顔をほころばせます。



ハルさんの着付けを
見てみよう



生方ハルさん
-高橋場町-

役者見守る最高齢座員
人形の持ち味生かした着付け

人形ができるまで



4 衣装を着ける

3 下着を着ける

2 胸輪を付ける

1 人形師の親指・小指に人形の手を付ける

脇役極めたい
細かな所作の練習重ねる



堤優衣さん
-同小4年-

高野智花さん
-沼東小6年-

母娘二役を語る
母思うお鶴の心感じて



石井愛衣里さん
-沼須町-

お互いの兄が稽古に励んでいるのをきっかけに始めた高野さんと堤さんは、三番叟の早乙女などを演じています。指の動かし方や細かな所作の練習を重ね、相手との息づかいを合わせることを意識しながら取り組んでいるといいます。脇役を極めることを目標にする高野さんは、「鈴などの小道具を使う舞がおもしろい。早乙女は自分に合っている」と話し、堤さんは「指が痛くなく、人形が外れないので動きに集中できる。生方さんに感謝」と笑顔を見せます。

「傾城阿波鳴門・巡礼の段」で、母娘二役の語りを務める石井さん。盗賊となった母・お弓が、訪ねてきた9歳の娘・お鶴を我が子と知りながら難儀をかけるのを恐れ、母親と名のらずに別れる描写を、語りで表現します。

石井さんはテープを聴きながら、台本を見なくても言葉が出るほど練習を繰り返してきました。「お鶴は芯が強い。一途に母を思い泣く泣く帰る姿を想像すると、泣けてくる」と話し、「我が子を愛するお弓の抑えられなくなる様相も感じてほしい」と呼びかけます。

石井さんはお弓の語りを安定させることを課題とし、自分のものにしていけるように力を入れます。